

『Sonia Delaunay』のデコ期作品アルバム

名誉教授（西洋服装史担当） 石 山 彰

最近とみに脚光を浴びてきたアール・デコ期の前衛女流作家にソニア・ドローネー（1885-1979）がいる。彼女の初期の最も著名な作品集が所蔵されている。〔K593.087-D〕 Sonia Delaunay, ses peintures, ses objects, ses tissus simultanés, ses modes, Paris, 1925. つまり『ソニア・ドローネー、その絵画・実用芸術・同時対比染織と衣装』ということになる。今では入手しがたい超稀覯書の一つで、本書抜きにして彼女の作品を語ることとはできないといわれるほど、代表作の一つに数えられる。ほぼ新聞紙1ページ大の大型本で、20枚のポショワールからなっており、目次も、いわゆる奥付けもないかわりに、アンドレ・ロート（André Lhote）をはじめとしてフィリップ・スーポール（Philippe Soupault）、トリスタン・ツァーラ（Tristan Tzara）、ジョセフ・デルターユ（Joseph Delteil）、ギヨーム・アポリナール（Guillaume Apollinaire）といった当時のそうそうたる詩人や作家たちが前文や賛辞を書き添えている。

彼女について最も詳細に記した『オックスフォード西洋美術事典』を引用することにしよう（「括弧内は筆者注」）。

「ウクライナに生まれ、ペテルブルク、カールスルーエを経由、1905年にパリに出て絵の勉強を続けた。ドイツ人批評家ヴィルヘルム・ウーデ（Wilhelm Uhde 1874-1947）と短期間結婚したが、1910年ロバート・ドローネー（Robert Delaunay 1885-1941）と再婚、彼のオルフィスム運動に加わった。ロシアの民族芸術で培われた演劇的・装飾的な色彩感を生かして、同時主義の原理を染織や実用芸術に応用し、その分野でユニークな活動を

展開した。なかでも、ブレース・サンドラルスの『シベリア横断とフランスのプティット・ジェアンヌの散文詩』を折本の形で挿絵づけした仕事（図1）や、ファッション衣装のための多量のデザインは、時代にさきがけたものであった。1929年、夫とともにサロン・デ・レアリテ・ズーヴェル（新現実）の創立に尽力し、戦後の再建にも協力した。夫の死後、彼の仕事の普及に努めるとともに、自身の絵画とデザインの広範な展開に最後まで活躍しつづけた。」これによっても、彼女の作品には大きく夫ロバールの影響が反映していることを忘れてはならないであろう。

ところでシミュルタネ（simultanée 同時対比）



図1 シベリア横断鉄道（2メートルに及ぶ折本の部分）1913年

とかシミュルタニスム (Simultanéisme 同時主義)、あるいはロペールにまつわるオルフィスム (Orphisme) 等については、いささか説明が必要であろう。なぜならソニアの染織作品やドレスには必ず Tissu Simultané とか Robe Simultané といったタイトルが付されているからである。英語に直せば simultaneous textile, simultaneous dress である。

シミュルタネとは色彩の同時的並置による作品の総称で、キュビスムの諸原則を色彩に適用して発展させようとした一群の“色彩のキュビスト”たちの作品に対して用いられる。この語はもともとフランスの色彩学者シュヴルール (M. E. Chevreul 1786-1889) の色彩対比論、すなわち *De la loi du contraste simultané des couleurs*, 1839『色彩の同時対比の法則について』¹⁾に基づいており、“ある色が別の色と並んでいるときには、色彩の同時対比によって色が変わって見える”と



図2 スカーフのデザイン 1923年

いう原理によっている。同時対比とは継続対比 continuous contrast つまり、ある色を見てから時間を置いて別の色を見る対比と区別して用いられる語で、俗にいう“配色”のことといつてよい。

夫ロペールが、絵画の中で実質的な空間と形を創り出すための彼独自の色彩の使い方をさして“同時的”とか“同時性”と呼んだことに始まっている。事実ロペールは「1912-13年頃、私は技術的には色そして色の対比にだけ依存し、しかし時間とともに発展してすべてを一挙に同時的に知覚されうるような絵がありうると考えた。私はそれを言い表すのに、シュヴールの〈同時対比〉という科学的用語を借りることにした。」と述べているし、さらには、「もっともシュヴールの用語法は純科学的であって、隣接する2色間では対比的なそれぞれの質が互いに強化し合うという視覚的効果を指していたのであるが、ドローネーの用語法は不正確・不分明であった。彼が言いたかったのは抽象絵画で形態や動きのイリュージョンを生むことができる唯一の、少なくとも最大の手段は色なのだ、という彼の持論である。(中略)この意味で〈同時性〉の概念は第一次大戦直前の数年間、文学・音楽・造形芸術の分野で最も議論のかまびすしかった論点なのであった。」²⁾

一方、詩人アポリネールはこの傾向を“オルフィスム” (Orphisme) と名づけた。オルフィスムとは一口にいえば“非再現的な色彩抽象”ということになる。本書には絵画4点、多数のドレスデザイン、子供服デザイン、スカーフのデザイン(図2)および幾つかのテキスタイルが収録されている。因みに有名なリヨンの染織美術館のカatalogueには3ページにおよぶソニアの染織作品が掲載されている。

注1) この理論は点描派の祖スーラ (Georges Seurat 1859-1891) やシニャック (Paul Signac 1863-1935) などによって絵画にも応用され、新印象派の理論的根拠となった。

2) オックスフォード西洋美術事典による。